

# 女子用往来物における漢字使用の実態と傾向

永井 悦子

【キーワード】江戸時代 女子用往来物 消息文 漢字 言語生活

## 1 はじめに

小稿は、女性用に編まれた往来物、なかでも消息文の雛形として、また手習いの教材として利用された「消息型」と分類される往来物<sup>(1)</sup>について、その使用漢字の実態と傾向を明らかにすることを目的とするものである。

江戸時代、女性向けに編まれた教訓書や書札礼には、漢字の使用を戒めたり、仮名を多用したいわゆる柔らかな表記を求めたりする記述<sup>(2)</sup>が散見され、これが当時の社会に浸透していた規範意識であったことがうかがえる。ただ、こうした当時の女性の言語使用（や規範意識）に関するこれまでの研究には、主に教訓書や書札礼の記述をもとになされたものが多く、当該期女性の言語使用の実態について具体的な調査を行った上で再検討する必要があると思われる。

そこで小稿では、女性が消息文をしたためるため、また文字を学ぶために編まれた往来物の一群を当該期女性の言語生活を映す資料として捉え、その調査、考察から、当該期女性の言語使用、特に漢字使用に関する具体的な様相を提示したい。

## 2 調査資料

小稿では、石川松太郎氏・天野晴子氏編『往来物分類集成Ⅱ 女子用往来編』（雄松堂フィルム、1994年）のなかから、筆者・編者及び成立年<sup>(3)</sup>の明らかな15本を対象とした。詳細は【表1】の通りである。なお、調査は消息文の形式をとった本文部分に限って行うこととし、柱や注、頭書や巻末に付された語彙集などは、含まない。

また、本調査では、資料とした15本の往来物を成立時期から三期に分けて考える。具体的には、石川謙氏（1968）が『庭訓往来』の出版状況をもとに行った以下の時代区分（前期：慶長8/1603～元禄16/1703年、中期：宝永元/1704～安永9/1780年、後期：天明元/1781～慶応3/1867年）に拠った。<sup>(4)</sup>

教育史の立場から研究を進める天野晴子氏（1998）によれば、女子用往来物は、上記時代区分でいう中期以降に使用者層が庶民層へ拡大し、それとともに教材内容や形態などが実用的なものへ移行するという。<sup>(5)</sup>小稿でも、こうした往来物の使用者層、題材の変容に留意しつつ考察を行っていきたい。

【表1】調査対象一覧

時期	No.	往来物名	編著者名	成立年	本文丁数	総文字数
前期	[1]	女庭訓往来	一花堂	万治 2/1659	102	11063
	[2]	女初学文章	一花堂	万治 3/1660	63	6863
	[3]	女筆往来	中川喜雲	万治頃/1660	57	4486
	[4]	女用文章	源女	天和 2/1682	66	4828
	[5]	女書翰初学抄	居初津奈	元禄 3/1690	62	4341
中期	[6]	女用文色紙染	田村よし尾	元文 3/1738	20	1072
	[7]	女文台綾囊	田中友水子	延享元/1744	82	3903
	[8]	女千載和訓文	文正堂	宝暦 9/1759	111	18719
	[9]	女用文章糸車	田中友水子	明和 9/1772	59丁半	5220
	[10]	女文章宝鑑	沢井随山	安永 4/1775	111	9436
後期	[11]	女諸用文章	橘正敬	寛政11/1799	110丁半	13664
	[12]	婦人手紙之文言	十返舎一九	文政 3/1820	60	6223
	[13]	女文章大和錦	池田東籬亭	天保 6/1835	168	15566
	[14]	女雅俗要文	為永春水	弘化 3/1846	103	15280
	[15]	女中用文玉手箱	山東京山	嘉永 4/1851	54	5421

### 3 漢字数・漢字表記語数

#### 3.1 概観

女子用往来物15本中に使用された漢字数<sup>(6)</sup>は、延べ字数で47176字、異なり字数で1352字、さらに延べ漢字数を延べ総文字数<sup>(7)</sup>で除した「漢字使用率」は、37.4%となった。これらを作品別にまとめたものが【表2】である。

まず、女子用往来物における使用漢字数について近世の文学作品と照らしてみると、書札礼などにおける指摘から想像されるのは大きく異なり、数値の上では、漢字使用の少なくないことがわかる。例えば、前田富祺氏による『奥の細道』の調査<sup>(8)</sup>、彦坂佳宣氏による洒落本の調査<sup>(9)</sup>と比較すると、女子用往来物における漢字数や漢字使用率は、これら両者を上回る結果となる。(両氏の調査については結果のみ抜粋し、【表3】にまとめた。)

ただ、消息文では、形容詞活用語尾や助動詞(例：久敷、目出度)の漢字表記や送りがなの省略(例：可申上候)が多く、こうした表記上の問題が漢字使用率に影響しているとも考えられる。そこで、さらに語表記という点からも見直すべく、漢字表記語率<sup>(10)</sup>も求めた。結果は【表2】に示した通りである。

漢字表記語率を求めた先行調査が少ないため、比較が難しいが、三原裕子氏が行った咄本13種についての調査結果<sup>(11)</sup>を参考にすると、13種のうち漢字表記語率の低い作品で33.8%、高い作品で67.8%、平均すると48.6%になるという。また、稿者が『奥の細道』<sup>(12)</sup>について行ったところ、48.0% (漢字表記語数3442語

／総語数7164語) と、咄本に近い結果を得た。

【表2】使用漢字数一覧

時期	作品	文字数				語数			
		異なり漢字数	延べ漢字数(%)	総延べ漢字数	振り仮名数(%)	漢字表記語数	交書表記語数	漢字表記率	総延べ自立語数
初期	1	451	2231 (20.2)	11063	913 (40.9)	1164	171	39.5%	3162
	2	90	901 (13.1)	6863	5 (0.6)	280	115	20.3%	1660
	3	221	985 (22.0)	4486	4 (0.4)	406	58	36.2%	1201
	4	190	992 (20.5)	4828	6 (0.6)	406	78	33.8%	1317
	5	413	1522 (35.1)	4341	786 (51.6)	669	72	54.1%	1302
中期	6	146	311 (29.0)	1072	119 (38.3)	145	13	48.2%	314
	7	387	1645 (42.1)	3903	815 (49.5)	860	87	70.3%	1285
	8	797	7869 (42.0)	18719	4808 (61.1)	4044	401	72.3%	5872
	9	441	1813 (34.7)	5220	758 (41.8)	913	152	62.4%	1586
	10	526	4439 (47.0)	9436	1554 (35.0)	2021	235	70.3%	3040
後期	11	652	6485 (47.5)	13664	3366 (51.9)	2941	323	74.3%	4173
	12	381	2449 (39.4)	6223	925 (37.8)	954	171	57.4%	1812
	13	541	6315 (40.6)	15566	3548 (56.2)	2737	468	64.2%	4628
	14	678	6262 (41.0)	15280	2413 (38.5)	2762	343	63.8%	4597
	15	416	2957 (54.5)	5421	748 (25.3)	1359	84	78.7%	1781
計	[1352]	47176 (37.4)	126085	20768 (44.0)	21661	2771	61.1%	37730	

【表3】参考：近世文学作品における漢字数

	異なり漢字数	延べ漢字数(%)	総文字数
奥の細道	1081	4436 (32.0)	13851
洒落本6種	1391	13552 (18.5)	73237

これらの数値に比べ、女子用往来物では、時期によって差があるものの、概ね中期以降、咄本や「奥の細道」といった当時の文学作品よりも高い値となる。平均値をとると、漢字を書き散らすべきでないと言われる女性消息文の半数以上の語が漢字表記されていることになる。

こうした点から、漢字を書き散らすことを戒める当時の書札礼の真意が、決して漢字使用の量的な面を意図したものでないことがうかがえる。また、漢字使用を制限されても、なお、漢字表記を必要とした語の少なくなかったことも推測される。これは、注(2)に挙げた書札礼の編者である居初津奈によって編まれた[5]『女書翰初学抄』の漢字使用率が35.1%、漢字表記語率が54.1%という結果

になっていることからみてもとれよう。

以上の通り、女子用往来物の漢字使用を数量的な面からみると、種々の書札礼で指摘される漢字の使用制限は、単純に漢字量を問題にしたものでなく、さまざまな漢字を書き散らすなどという、いわば質的な制限であったと解釈できよう。とすれば、女子用往来物において頻用される漢字群には、当時女性が使用するのに不都合がないとみなされていた、当時、女性にまで定着していた漢字字種が含まれている可能性が高いとも考えられる。

### 3.2 時期による傾向

【表2】の数値を時期別に見ると、前期から中期、後期と漢字使用率・漢字表記語率ともに増加傾向にある。<sup>(13)</sup> 一見すると、女性識字層の増加、或いは識字教育の強化とも映るが、この漢字使用の増加傾向と使用者層の拡大に伴う往来物の形式上の変化とが軌を一にしている点をまず、考慮する必要がある。

先に中期以降、往来物の形式や内容に種々の変化がみられる点には触れた。<sup>(14)</sup> 漢字使用の増加傾向には、往来物の庶民層への普及に伴った実用化傾向のなかでも特に、散らし書き文面の減少、振り仮名の増加、この両者が大きく影響しているのではないかと考える。

散らし書きについては、先に拙稿（2005）でも触れたので詳述は避けるが、散らし書き・並べ書き両者における漢字使用率は平均で[33.2 : 41.5]となり、より実用的な並べ書きの文面において漢字使用が多くなる。前期でも、特に漢字使用率の低い[2]『女初学文章』は、全編散らし書きの消息文例を取めたものであった。

また、振り仮名についてみると、【表2】中に示したとおり、漢字使用率と同様、振り仮名付記率（振り仮名の付された漢字数／総延べ漢字数）も中期以降増加傾向にあり、関連が認められよう。

漢字使用の増加傾向は、上記のような往来物の形態上の変化による影響が強いと考えられるため、これを単純に女性識字層の増加と置き換えることは難しい。しかし、中期以降、往来物の作者が振り仮名を付してまで漢字を多用した背景には、種々の漢字を教え知らしめようとの意図がうかがえ、当時の女性の識字能力を考える上では、注目される。

## 4 使用漢字の実態と傾向

### 4.1 累積使用率から—使用率・共出現数に着目して—

本節では、女子用往来物に使用される漢字のパラエティについて、累積使用率を求め、考察を行う。異なり漢字数の累積使用率と延べ漢字数の累積使用率との関係を【表4】に示す。

漢字の累積使用率に関する先行研究にあたり、『徒然草』『西鶴置土産』等に

ついて行った小野正弘氏（2002）の調査、また、黄表紙20種について行った浅野敏彦氏（1988）の調査がある。小野正弘氏（2002）は、「異なり漢字数1000字前後のテキストの場合、上位60～80字程度で総使用数の半分がまかなわれている」と指摘し、浅野敏彦氏（1988）は、この調査で全体の50%を表記するのに45字（異なり字数の約5%）、70%を表記するのに約100字（異なり字数の約10%）を要するとの結果を提示し、さらに他の漢字調査との比較から、「字種が少なく、同じ漢字が繰り返し使われる」点を黄表紙の特徴として挙げている。

こうした先行研究に対し、女子用往来物では、異なり漢字数の1.55%にあたる21字で全体の50%を、また異なり漢字数の6.58%にあたる89字で全体の70%を占めるとの結果を得た。本調査の結果は、近世出版物のなかでも漢字使用が少ないと言われる黄表紙の数値をも下回っており、殊に一部の字種が頻用される傾向が顕著であることがわかる。

【表4】使用漢字の累積使用率

延べ 累積使用率	異なり 累積漢字数(比率)	共出現数					備考
		15-13	12-10	9-7	6-4	3-1	
～20%	1 ( 0.07)	1	—	—	—	—	1, 1, 1
～30%	2 ( 0.15)	1	—	—	—	—	1, 1, 1
～40%	8 ( 0.59)	6	—	—	—	—	6, 5, 6
～50%	21 ( 1.55)	11	2	—	—	—	12, 13, 12
～60%	44 ( 3.25)	19	4	—	—	—	21, 21, 21
～70%	89 ( 6.58)	26	18	1	—	—	43, 40, 43
～80%	164 ( 12.13)	32	30	13	—	—	68, 65, 75
～90%	321 ( 23.74)	—	43	98	14	2	143, 141, 138
～100%	1352 (100.00)	—	3	81	244	703	741, 691, 600

※備考欄には、各区間に属する漢字について「常用漢字表」「古代共通字種」<sup>(19)</sup>「洒落本漢字」と合致した数値を記した。

具体的に、延べ漢字数の70%をまかなう上位89字を使用率順に挙げると、以下の通りとなり、消息文体には欠くことのできない待遇表現に関わる漢字群〈御、候、申、上、下、様、存、成、仰、参、遊、給、座、致、召〉や付属語〈被、度、共〉・活用語尾〈度、敷、得〉の表記に用いられる漢字群が多数含まれていた。また、〈日、折、花、月、年、節〉はいずれの消息文にも付される「前文」部分にあたる時候の挨拶に用いられる語に使用されることが多い。

[高使用率の漢字群]

御 候 申 事 上 下 様 入 一 此 存 心 祝 日 見 人 出 被 思 成 仰 折 々  
 方 度 何 文 参 物 子 忝 遊 礼 給 返 春 花 中 今 月 年 所 山 手 目 扱

幾敷色二其進座五久取重千相殊悦付程義世夜夕致有  
万誠召内通節身儀氣機共詠比打筆外斗又代得

ただ、女子用往来物では、教材という性格上、日常のさまざまな場面に対応できるように配慮がなされ、題材の異なる種々の消息文例が収載される。さらに、個々の表現についても、同語の重複を避けるよう、さまざまな言い換え表現が工夫される。そのため、先に示した消息文体を構成する上で不可欠の語やいずれの消息文にも登場する話題（時候や安否の挨拶など）に関連する語の表記に使用される漢字群と、各消息文例個々の題材に関わる語の表記に使用される漢字群とは、その使用率に大きな開きが出るのが予想される。

よって、往来物の場合には、文学作品等と異なり、頻度や使用率のみならず「共出現数」<sup>(6)</sup>にも着目する必要があるだろう。試みに、累積使用率71～100%の範囲で共出現数「10」以上の108字を使用率順に挙げると、以下ようになる。〈雪、雨、露、雲、天、星、寒、朝〉〈松、菊、梅、草、桃〉といった天候や季節に関わる語、〈袖、着、衣、樽、酒、紙〉といった中元や歳暮の贈答品例として挙げられる語の表記に用いられる漢字が散見される。これらは、使用率は高くはないものの、どのような往来物にも採られる当時要用の題材に関連するものであり、これもまた、当該期女性にとって欠くことのできない漢字群であったと考えられる。

[共出現数の高い漢字群]

大明時送葉過間供雪雨早長立待先三暮殘後咲風嬉庭  
空猶小神合納闌松末用近初道袖来能四元遠私水居寒  
玉菊天念無名脈梅木浅着本朝七家安越舞音前生衣多  
数昨客草白歳産書閑分宵兼置地句行願紅奉八是露向  
更雲使移籠田星態樽引結陽酒桃紙和

以下、試みに初期と後期の往来物 [4]『女用文章』、[14]『女雅俗要文』から一通ずつ消息文例を引いた。いずれにおいても「御、候、申」等の使用回数が多く、「菊、雨、寿、袖」<sup>(7)</sup>など消息文例の題材に関わる語を除き、すべて上記[高使用率の漢字群]でまかなわれていることが確認できる。

・文詠まいらせ候 きふはわか身事おほしめし候よしさに候はんとそんし  
候仰のことくちりての後ほこふるしるしも御座なく候まゝけふのそほふる  
雨にもせひにもよほし候はんと存候 ぬるとも花のかけにかくれ申候べく候

[4]no. 06「三月につかはす文 同返事」

・菊がさねの御しうぎ いづかたもおなし御事に御めて度御祝ひ入まいらせ  
候いよ(いよ)御きけんよく今日の御寿御にぎ(にぎ)しく御いはひ(いはひ)遊  
はし候御事 万々年もと御目出たく存あけまいらせ候 さらはこの御小袖一  
かさね御めてたく相かはらず 御しうき申上まいらせ候しるしまでに御らん  
に入まいらせ候

[14]no. 48「重陽の文」

## 4.2 日本語表記における女子用往来物使用漢字

漢字が伝来して以来、日本語表記において漢字がどのように使用されてきたかを明らかにするため、これまでさまざまな時代の文献を対象に調査が積み重ねられている。言語生活史という立場から漢字使用の実態を考えると、本稿で扱う往来物の類がそこに少なからぬ影響を与えること<sup>(10)</sup>は首肯されよう。ここでは、先行研究との比較を通し、女子用往来物使用漢字の特性を探っていきたい。

まず、女子用往来物使用漢字を「常用漢字表」に照らすと、異なり漢字数1352字のうち1036字(76.6%)が重なり、316字が表外字であった。表外字の割合は、23.4%と、一見多くも見えるが、【表4】備考欄に示した通り、これらは概ね使用率が低く、延べ漢字数の累積使用率で見ると、91%以上の区間に290字が含まれている。よって、高使用率の漢字群は、現代常用される漢字群と大きく離れたものでないとみることができよう。

試みに、使用率上位89字に含まれる表外字を挙げると、「此、々、忝、扱、其」の5字のみであった。「此、其、扱」といった指示語や接続詞の類は、消息文例に限らず近世の文献においては漢字表記されることが多く、現代との表記習慣の違いによるものとみてとれる。

次に、時代をさかのぼり、岩淵匡氏(1976)の調査による古代主要文献(『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』)における共通漢字(1804字)<sup>(11)</sup>と比較すると、978字(72.3%)が一致をみた。一致をみないもののうち、延べ累積使用率70%までの89字に含まれるものが8字、91%以上の範囲に含まれるものが840字と、「常用漢字表」の場合と同様、高い使用率の分布において一致するものが多い。使用率上位89字で合致しない8字を挙げると、「様、々、忝、扱、殊、悦、程、筆」となる。「扱」のような国字や「様」のような日本で独自の用法を獲得していった字種が含まれる点は、古代とは異なる近世期の特徴として注目されるが、全体の傾向としては、高使用率の漢字群を中心に、古代から時代の影響を受けずに使用され続けてきた字種で構成されていることが確認できよう。

最後に、同時代の作品との比較を行う。彦坂佳宣氏(1987)が提示する洒落本6種の使用漢字(1391字)<sup>(12)</sup>に照らすと、897字が一致をみた。「常用漢字表」、古代主要文献の共通漢字に比べ、対象となる漢字数1391が少ないこともあり、全体の一致率は66.3%にとどまった。洒落本使用漢字との一致率の低さの背景には、表現世界が異なること、「常用漢字表」や古代文献における共通漢字に比べ、比較対照となる分母が小さいことなどが挙げられようが、さらにもう一つ、「書く」漢字、「読む」漢字という相違があるかと思われる。

例えば、使用率上位89字の内、洒落本に現れない「仰、忝、殊、詠」4字は、下記の通り、「忝なし」「殊に」「仰す」「詠む」といった消息文例に頻用される語<sup>(13)</sup>の表記を担うものである。

・御消息下され 殊に新宅の御祝と仰られ 御樽肴おくり下され 忝いわみ

納まいらせ候

[ 8 ]no. 83 「移徙の所へ遣す文 同返し」

・初春の御寿として細々との御文給り くり返し詠入まいらせ候

[13]no. 2「年始の文・同返事」

〈書く〉漢字、〈読む〉漢字、両者の大部分は重なるはずであるが、洒落本と合致しない上記のような漢字群は、特に〈書く〉漢字として不可欠のものであったことがうかがえる。これらは、文学作品を中心とした調査からはじかれてしまう可能性が高い。今後、漢字使用の変遷を考察する際には、文学作品に限らず、広範囲の資料に目を向ける必要がある。

以上、通時的にまとめるには、やや粗い比較ではあるが、女子用往来物使用漢字の多くが時代の影響を受けず、古代から現代にかけて使用され続けたものであることは確認し得たかと思う。また、今回対照したいいずれの調査とも、使用率の高い漢字群での一致率が高く、種々の文献で基盤となる漢字群には、時代による差異がみられないという先行研究での指摘<sup>(22)</sup>にも合致するものであった。

#### 4.3 漢字の用法について

本節では、現代の「常用漢字表」を手掛かりに、女子用往来物における音訓用法の傾向について確認する。まず、「常用漢字表」と共通する1036字のうち、〈その他〉の用法しかもたない22字を除く1014字の音訓用法について「常用漢字表」と照らすと、次のような結果となった。

	音	訓
「常用漢字表」に含まれる	655	540
「常用漢字表」に含まれない	67	222
計	722	762

「常用漢字表」との一致率を求めると、音、訓それぞれ90.7%、70.9%となる。かつて高梨信博氏(2000)が心学道話『鳩翁道話』について行った調査では、音が94%、訓が78%という結果が示されており、これに比すと女子用往来物の方がやや低率で、特に訓に一致を見ないものが多いようである。「髪」を「ぐし」、「酒」を「ささ」というように女中詞をよみとして与えるものなど、女性用の消息文らしい表現が一致率の低さの一因ともみられる。しかし、以下に挙げた表外の訓(複数の往来物に現れたものに限って挙げた)をみると、近世の戯作類に登場する訓が多く、当時一般に目にする事の多かった訓であるとも考えられる。

愛めでたし 以もつて 委くはし 易やすし 為ため 壹ひと/ひとつ 詠  
ながむ 益ますます 悦よろこぶ 翁おきな 何いづく 可べし 暇いとま  
覚おぼす 希こひねがふ 宜よろし 吉よし 却かへる 究きはまる 給たまはる/たまふ 居をる 抛よんどころ 許もと 具つぶさ 健すくやか  
験しるし 古いにしへ 御おみ 後のち 克よし 最いと/も 歳とし 産うぶ 子ね 思おぼす 支つかふ 枝え 詞ことば 侍はべる 若もし 種



くさ 酒ささ 終つひに 出いだす/いづ 処ところ 初そむ 諸もろ 女  
 をなご 序ついで 勝すぐる 少ちと 尚なほ 証しるし 辱かたじけなし  
 推おす 是これ 先まず 前さき 漸やう 相あふ 側そば 則すなはち  
 態わざと 達たち 端ば 遅おそなはる 中うち 調ととのふ 弟おとと  
 伝つて 斗ばかり/はかる 度たし 忒ふた 入しほ 如ごとし 年とせ  
 納いる 能よう/よく/よし 髪ぐし 比ころ 被る 不ず 夫それ/つま  
 布しく 併しかし 偏ひとへ 豊とよ 埋うづむ 毎いつ/いつも 万よろ  
 づ 未いまだ 妙たへ 面も 唯ただ 猶なほ 類たぐひ 例ためし 齢よ  
 はひ

さらに、こうした表外音訓について『岩波国語辞典』<sup>(33)</sup>の漢字母に提示された音訓と照合すると、8種の音、125種の訓が確認できた。上記例中、下線を施したものの以外は、すべて記載がある。現代の国語辞典の漢字母に含まれるという事実を、現代社会で認められた音訓と捉えるならば、「常用漢字表」と合致した数値と合わせ、音の91.8%、訓の87.3%までが現代に通じるものだとということになる。臨時的な、或いは特殊なよみが少なかったと考えられる。

また、(その他)とした、熟字訓やあて字の用法は、133表記みられた。複数の往来物に出現したものを挙げると、以下の通りになる。

明後日 明日 如何 日外 田舎 稻荷 初生衣 長閑 元方 扇子 伯父  
 音信 乙女 女子 叔母 帷子 哥賃 彼方 河原 昨日 今日 草臥  
 被下 今朝 気色 去年 今年 今宵 越なし 更衣 小竹筒 誘引  
 三味線 五月雨 時雨 支度 清水 西瓜 双六 七夕 田面 玉章 一寸  
 縮緬 祖父 朔日 常磐 名残 何角 何卒 而已 客人 水無月 土産  
 饗応 紅葉 木綿 弥生 余所 四方 移徙

このうち「常用漢字表」に含まれる「明日、田舎、伯父、乙女、河原、昨日、今日、今朝、心地、五月雨、三味線、土産、紅葉、木綿」をはじめ、現代でも目にするものが多い。また、『書言字考節用集』<sup>(34)</sup>といった同時代の辞書に記載が確認できるものが多く(上記例中、下線を付したものがこれに当たる)、当時、多くの人が目にしたであろう安定した表記であった可能性が高い。

以上の通り、音・訓・その他の用法、いずれも、現代あるいは近世期において定着していた用法の枠を出るものは少なく、同時代の戯作類に見られるような臨時的な、特殊な用法はみられなかった。こうした傾向は、消息文が他者への伝達を目的とした言語行為であるという点と大きく関わると考えらる。消息文はあくまでも書き手と読み手の間に存在するもので、書き手だけが知っている語や表記を用いても意味をなさない。よって、書き手側には、誤読や誤解が起きないように、確実に読み手に伝わる表記を選択する意識が働いたと推測される。読み物であれば、振り仮名などによって読者の読みを助けることもできようが、消息文の場合、それは適わない。そのためにも、当時消息を取り交わす人々の間に定着していた

表記が選ばれたと考えられる。こうした点を勘案すると、女子用往来物における様相は、当時の社会における常用的な音訓用法を考える上で、有益な手掛かりを与えてくれるものと考えられる。

## 5 おわりに

以上、女子用往来物に用いられた漢字群について、数量的な面、使用漢字とその用法について検討し、女性の漢字使用を戒める書札礼が種々編まれるなかにあってもなお、使用される漢字群の少なくないこと、またそれらが時代の影響を受けずに日本語表記を担っているものであることなどを確認した。こうした女子用往来物に出現した漢字群の多くは、当時、消息文などをしたためることのできた女性たちが使用するのに違和感を覚えぬ、当時の日常生活に定着した字種であったと推測される。

今後、本調査で得られた往来物における使用漢字が実際に取り交わされた消息文や書き付けの類にどの程度反映されているのか、具体的な言語使用の形跡が見いだせる資料類に照らし、検証を行う必要があると考える。これについては、今後の課題としたい。

### 【注】

- (1) 石川松太郎氏の女子用往来物の内容による四分類(「教訓型」「消息型」「社会型」「知育型」)に従った。石川謙氏・石川松太郎氏(1973)「解説」参照。
- (2) 例えば、女子用往来物の代表的作者、居初津奈が編んだ往来物『女文章鑑』(貞享5/1688年)の巻尾に付された女性消息文心得集には、「一 女文章はめづらしき字をかくべからず 仮名文字にてかく最やさしき也」という一項がある。
- (3) 編著者、成立年など書誌に関しては、小泉吉永氏編『日本書誌学大系80 女筆手本解題』(青裳堂書店、1988年)を参考にした。
- (4) 石川謙氏(1968)「庭訓往来型における編集方式と教材選択基本の変遷」『日本教科書大系 往来編(三) 古往来(三)』による。
- (5) 天野晴子氏(1998)「第四章 女子教育史における女子消息型往来の意義」(pp. 383-483)に詳しい。
- (6) 今回、字体の整理に関しては、主に『角川新字源』300版(1990年 角川書店)を利用し、この「親見出し」によって確定を行った。また、総文字数を算出する際、「まいらせ候」「候べく候」などを表す合字は、「その他」として繰り返し符号(「々」を除く)などと同様に扱い、「漢字」には含めていない。

尚、小稿の調査結果には、既に拙稿(2005)、(2006)において報告したものを一部含むことを予め断っておきたい。拙稿発表後、データを整備、修正した

ため、小稿と若干数値の異なるものもある。が、前稿で示した傾向や結果に影響を与えるものでないことを付言しておく。

- (7) 総文字数は、漢字、仮名、その他の総計とする。
- (8) 前田富祺氏(1966)による。
- (9) 彦坂佳直氏(1987)は、『日本古典文学大系59 黄表紙・洒落本集』(岩波書店、1958)所収の6作品(『遊子方言』『辰巳之園』『道中粹語録』『卯地臭意』『総籬』『傾城買二筋道』)を対象として調査を行っている。
- (10) 漢字使用の分析において「漢字表記語率」が有効である点は、土屋信一氏(2000)に指摘がある。「漢字表記語率」は、漢字表記語数と交ぜ書き表記語数を自立語の総数(延べ語数)で除し、その割合を求めたものである。その際、交ぜ書きは「0.5」として計算した。
- (11) 三原裕子氏(2005)の単語認定基準は、本調査よりも長く、文節に近い。よって、厳密な意味での比較とは言えないが、おおよその傾向は見てとれると考え、比較を試みた。
- (12) 『日本古典文学大系46 芭蕉文集』(岩波書店、1959)をテキストとした。
- (13) 女子用往来物の漢字使用の史的変遷については、既に小泉吉永氏(2000)が20本の往来物の冒頭一通分の漢字使用率を算出し、前期以降増加傾向にあることを指摘している。小泉氏の調査からもおおよその傾向は捉えられるが、ここでは、調査範囲を往来物に収められた全文例に拡大し、さらに漢字表記語率などの面からも確認したい。
- (14) 前掲注(5)に同じ。
- (15) ここでいう「古代共通字種」は、岩淵匡氏(1976)に提示されている『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』4種に共通する漢字群を指す。
- (16) 「共出現数」という術語は、国立国語研究所(1983)による。同書には、「ある語が何教科に共通に用いられているかを調べ、これを集計したもの」(p. 40)とある。ここでは、15本の往来物のうち何本に出現したか( $1 \leq n \leq 15$ )を示すものとする。
- (17) 「寿」は[共出現数の高い漢字群]の一覧に含まれていないが、「延べ累積使用率」で「~80%」の区間に属し、共出現数は「9」であったので、これに類するものと考えられる。
- (18) 岩淵匡氏(1986)では、言語生活史における漢字使用の実態を考える上で、問題とすべき点の一つに文字教育に関することがらを挙げている。p. 22
- (19) ここでは、岩淵匡氏(1976)に提示されている『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』4種に共通する漢字群を比較対照とした。
- (20) 前掲注(9)に同じ。
- (21) 「仰、忝、殊、詠」が表記を担う語は、自立語の異なり語数4188語のうち、いずれも使用率の高い語であった。以下、主な語の順位を参考までに示す。

「忝なし」：15位、「仰す」：43位、「殊に」：48位、「詠む」：91位

- (22) 岩淵匡氏 (1995) p. 7、小野正弘氏 (2002) p. 53に指摘がみられる。岩淵匡氏 (1995) は、『浮雲』の漢字調査のなかで、「使用度の高い字種については時代や文献による差はあまりないものと推定することが出来る」と指摘する。
- (23) 西尾実氏他編『岩波国語辞典 第六版』(2000、岩波書店)を使用した。
- (24) 中田祝夫・小林祥次郎編『書言字考節用集研究並びに索引 索引篇／影印篇』を使用した。

### 【参考文献】

- 浅野敏彦(1988)「黄表紙の漢字—江戸時代後期の庶民生活—」『大阪成蹊女子短期大学研究紀要』25
- 天野晴子(1998)『女子消息型往来に関する研究—江戸時代における女子教育史の一環として—』風間書房
- 石川謙・石川松太郎編(1973)『日本教科書大系 往来編(一五)女子用』講談社
- 岩淵 匡(1976)「日本語における基本字種—古代前期の文献資料から—」『学術研究 国語国文学編』24
- 岩淵 匡(1986)「文字生活における漢字」『日本語学』5-6
- 岩淵 匡(1995)『浮雲』にあらわれた漢字について』『早稲田日本語研究』3
- 小野正弘(2002)「使用高頻度漢字の歴史的推移と基本度」『日本語の文字表記研究会報告論集』国立国語研究所
- 小泉吉永(2000)「解説Ⅱ」『江戸時代女性文庫・補遺 女筆手本類12』大空社
- 国立国語研究所 (1983)『国立国語研究所報告76 高校教科書の語彙調査Ⅰ』秀英出版
- 高梨信博(2000)「心学道話の漢字—『鳩翁道話』を中心に—」『国文学研究』131
- 土屋信一(2000)「明治・大正・昭和期の漢字使用—東京日日新聞を資料として—」『国語文字史の研究 五』和泉書院
- 彦坂佳宣(1987)「洒落本の漢字」『漢字講座7 近世の漢字とことば』明治書院
- 前田富祺(1966)「奥の細道の漢字」『宮城学院女子大学研究論集』28
- 三原裕子(2005)「後期咄本における漢字の使用傾向とその要因—漢字の使用と表現意図の関わり—」『語文』121
- 永井悦子(2005)「近世後期女性読者の識字傾向に関する一考察」『国文学研究』145
- 永井悦子(2006)「近世女子用往来における仮名字体」『国語文字史の研究 九』和泉書院

—ながい えつこ 早稲田大学教育学部非常勤講師—